

科目名称	環境化学実験
授業コード	AB260
英語名称	Experimentation of Environmental Chemistry
学期	2024年度後期
単位	4.0
担当教員	辻本 敬, 和田 龍一, 山際 清史, 釘田 強志
記入不要 ナンバリングコード	
授業の概要	<p>カリキュラム・ポリシーに掲げている能動的に学ぶ機会の効果的な取り入れ、実践力の養成を目的とした実験実習科目の一つである。</p> <p>環境問題を検証し、その解決を図るためには、自然現象を支配する法則の理解と自然現象を計測する手法の習得が必要である。そのためには、自ら実験を行うことが確実に効率的な道である。本実験では、「金属イオンの分離と定性」、「大気分析」、「水の浄化」、および「水道水中の塩化物イオンと硬度の測定」に関する実験とレポート作成などを通して、環境対象とした化学分析の基礎となる知識を習得し、基本的な実験技術、分析機器の原理と取り扱い、データ解析法、さらにプレゼンテーション技術を学ぶ。</p>
科目に関連する実務経験と授業への活用	<p>企業での分析開発に関する業務経験のある教員（和田）が、実際に起こりうる失敗事例を紹介しながら、実験のポイントを丁寧に説明する。</p> <p>随時、環境計測系企業に勤務している実務経験者を招聘し、最新の情報を紹介する。</p>
到達目標	<p>1) 環境計測における基礎知識と基礎技術を身につける。</p> <p>2) 実験とその結果の解析を通じて、科学的思考力、まとめる力、さらに説明する力を身につける。</p> <p>3) 他者との協調・協働等のチームワークの重要性を理解する。</p> <p>4) 結果に真摯に向き合う倫理観を養う。</p> <p>上記1)、2)は自然環境学科のカリキュラム・ポリシーに掲げる実践力の養成、また、3)、4)はディプロマ・ポリシーに掲げる人間性を身に付けることに対応する。</p>
計画・内容	<p>1. ガイダンス 担当：辻本・山際・釘田・和田 予習：シラバスを読んでくること。 復習：授業方針と日程を確認すること。</p> <p>2. 水中の金属イオンの分離と定性 担当：辻本 水中からのAg、Pb、Fe、Mn、Cr、Al、Cu、Co、Al、Niイオンの分離( )</p> <p>3. 水中の金属イオンの分離と定性 担当：辻本 水中からのAg、Pb、Fe、Mn、Cr、Al、Cu、Co、Al、Niイオンの分離( )</p> <p>4. 水中の金属イオンの分離と定性 担当：辻本 水中からのAg、Pb、Fe、Mn、Cr、Al、Cu、Co、Al、Niイオンの分離( )</p> <p>5. 水中の金属イオンの分離と定性 担当：辻本 未知試料の定性分析</p> <p>6. 水中の金属イオンの分離と定性 担当：辻本</p>

計画・内容	<p>未知試料の定性分析の続きとまとめ</p> <p>7. 大気分析 担当：和田（実務経験あり） 実験概要の説明とザルツマン試薬の調製</p> <p>8. 大気分析 担当：和田（実務経験あり） 大気試料の屋外サンプリング</p> <p>9. 大気分析 担当：和田（実務経験あり） 実験装置の組み立てと大気試料の分析</p> <p>10. 大気分析 担当：和田（実務経験あり） 標準試料の較正曲線の作成</p> <p>11. 大気分析 担当：和田（実務経験あり） 実験データの解析とまとめ</p> <p>12. 大気分析 担当：和田（実務経験あり） まとめと発表</p> <p>13. 水の浄化 担当：釘田 凝集沈殿による水の浄化</p> <p>14. 水の浄化 担当：釘田 活性炭による有機物の吸着分離</p> <p>15. 水の浄化 担当：釘田 イオン交換樹脂による金属イオンの吸着と脱着</p> <p>16. 水の浄化 担当：釘田 データ解析</p> <p>17. 水の浄化 担当：釘田 まとめ</p> <p>18. 水道水中の塩化物イオンと硬度の測定 担当：山際 実験概要の説明と溶液調製</p> <p>19. 水道水中の塩化物イオンと硬度の測定 担当：山際 沈殿滴定による水道水中の塩化物イオンの定量</p> <p>20. 水道水中の塩化物イオンと硬度の測定 担当：山際 キレート滴定による水道水中の硬度の測定</p>
授業の進め方	<p>1) 各回のはじめに、実験内容に関する説明を行う。 グループで実験を行う場合もある。実験中にも必要に応じて補足説明を行う。</p> <p>2) ノートチェック、即日課題、実験結果の発表等を必要に応じて実施する。</p> <p>3) テーマごとにレポートを提出する。</p>
能動的な学びの実施	<p>毎回、自分で手を動かして実験を行い、その結果を考察する。</p>
授業時間外の学修	<p>予習：実験テキストを熟読し、各回の理論と実験操作を理解し、ノートにまとめてくる。</p> <p>復習： 実験データを整理し、さらにレポート作成を逐次進めること。 （予習・復習には全体で40時間程度かけること）</p>